

全国森づくり・里山再生フォーラム in 愛知
「森林環境教育全国シンポジウム」

愛知レポート

～ 愛知万博・海上^{かいしよ}の森から提案する実践的な森林環境教育～

平成18年9月22日～23日

森林環境教育全国シンポジウム愛知実行委員会



ねらい

森林は、多面的機能の発揮を通じて、私たちの生活と深く結びつき、環境・経済の安定に欠くことのできない「緑の社会資本」として、さまざまな形で私たちに恩恵を与えてくれている。今後、持続可能な社会の構築が重要な課題となる中で、木材の持続的生産と、二酸化炭素の吸収、貯蔵を同時に果たせる人工林は、その解決に大きな役割を担っている。

また、都市近郊の里山林は、適切な整備と利用により、生物の多様性を維持、回復し、住民の保健休養や森林環境教育の場として、広く活用されることが期待されている。

しかし、木材価格の低迷や山間地域の過疎高齢化、里山の都市開発、ゴミの不法投棄等それぞれの現場では、困難な課題を抱えており、それらの解決に向けた、社会全体の合意形成による支援・協働・連携が不可欠な状況にある。

「自然の叡智」をテーマに、愛知県で開催された2005年日本国際博覧会（愛知万博）では、会場計画の検討段階から、自然環境への影響について市民参加による検討会議などにより、根気強く合意形成を図る努力が積み重ねられ、自然に配慮した会場づくりが達成された。

その議論の中心となったのが海上の森である。自然保護と開発のあり方や環境博とも言われた博覧会のテーマ実現に大きく関わり、愛知万博の象徴であるとともに原点の森となった。

愛知県は、この海上の森を愛知万博記念の森として保全活用する「あいち海上の森条例」を制定した。

これは、「あいち海上の森センター」を核に、この森を人と自然の関わり方を探求する場とし、持続可能な社会の実現に向け、県民の合意形成や協働・連携を促すため、森林や里山に関する学習と交流の拠点とすることを表明したものである。

このたび、「あいち海上の森センター」の開館を機に「愛知万博・海上の森から提案する実践的な森林環境教育」をテーマに全国シンポジウムを開催する運びとなった。

このシンポジウムのまとめとして、愛知万博の成果や課題、海上の森での保全活用事例などを題材に、参加者を交えた議論や分科会ごとの提言を踏まえて、「愛知レポート」を作成し、森林環境教育の更なる普及発展に寄与することをねらいとするものである。



提案 1

森づくりと森林環境教育とのかかわり

海上の森付近には、木材生産林として育成されてきた人工林が多く残されており、間伐等の手入れ遅れが目立つ状況にある。

全国的な問題となっている林業活動の停滞は、当地においても顕著であり、小規模所有、過疎化、木材価格の下落等により、到底所有者の自覚、意欲のみに期待できる状況ではない。しかしながら、持続可能な社会を目指す上で人工林の果たすべき役割は大きく、公的な資金を投入してでも、当面必要な整備を進めざるを得ない。

人工林の役割や今必要な手入れについて、広く合意形成を図ることが、まずはじめにされるべき努力といえよう。

森林環境教育により、そのことを広く普及啓発する手立てについて、愛知県の地域性や海上の森での事例から提案する。

様々な場面で、森づくり活動参加者と森林所有者の出会いの場を作り、顔の見える交流を重ね、相互理解を深めよう。(行政は両者の出会い創出、フィールド提供、意見交換機会提供等、協働を促すための支援を積極的に行う。)

人工林(スギ、ヒノキ等)にまつわる誤解を解き、悪いイメージを改め、持続可能な林業活動の必要性を理解してもらうための森林環境教育活動をはじめよう。

森づくりを通じ、山や里に住む人々の、「自然と共存する暮らしの知恵」を学び、「自然をたくみに利用する技」を知り、「自然を畏れ敬う気持ち」を感じられるような、森林環境教育活動を目指そう。



提案 2

愛知万博を契機に考える市民参加による森林環境教育

愛知万博が計画されてから開催されるまでの長い時間の中で、海上の森につながる市民を中心に、その価値が再発見されたり、さまざまな問題提起がなされたり、課題解決のための取り組みや交渉が行われてきました。

また、開催期間中の「森の自然学校」「里の自然学校」では公募による市民インタープリターが主体となって、多くの来場者に自然と接するきっかけを提供する試みがなされました。

これらは、「市民」とは何か？「市民参加とはどうあるべきか？」を考えるための貴重な事例を含んでおり、地域において市民が森林環境教育を実践する際の、モデルケースや参考事例となります。

個人、NPO、企業、行政 それぞれが同じ社会を構成する、同じ市民としての自覚を持ち、フラットで双方向の協働により実践する森林環境教育のあり方や進め方について提案する。

個人、NPO、学校、企業、行政・・・それぞれが社会を構成する同じ市民としての自覚をもち、フラットで双方向の協働による実践を目指そう。共通の問題意識を持ち、互いに顔の見える関係でテーブルを囲んだり、共有するフィールドを使ったりして、環境について学び、森林環境教育の実践を行おう。

活動を始める前に、大きな目的を明確化して共有することが必要である。そして、具体的な行動にうつる時は、小さな目標が必要で、その結果を大きな目的に照らしてチェックしよう。

市民同士の慣れあいや、相手は自分と同じという思い込みを排除するために、反省と評価も忘れないようにしよう。

市民と行政の関係性を築き共有するために、法的な根拠をつくることを目指そう。

市民、学校、行政、企業、あらゆるセクターがゆるやかに連携し、地域に根ざした魅力的で個性的な森林環境教育に関するプログラムや活動を積極的に広く発信し、参加者を広げよう。

知識だけでなく、体験を重視してリーダー育成を行おう。そして、地域全体でリーダーを支える体制を整えよう。



提案 3

里山文化の継承から考える森林環境教育

「海上の森」は、早くから開かれた場所＝開所（かいしょ）からその地名になったとも言われており、この地の人々の営みの中で育まれた独自の生活文化を構築してきた。

それらを背景に、海上の人たちが中心となり当地にあった古民家の移築復元に取り組み、この地の歴史文化を身をもって学ぶとともに、古民家を活用して年中行事が復活されるなど、海上の暮らしを見直し、継承する取り組みが始まった。

森林と人との関わりを考える森林環境教育を進めるにあたっては、その土地の里山の歴史文化の再発見と継承を切り離して考えることはできない。

里山の歴史文化を正しく理解し、そして継承していくため、里山文化の側面から考える森林環境教育を提案する。

里山は、地域固有の暮らしの技や知恵やこころを育て今日に至っており、人と自然の豊かで生き生きとした交わりをいっそう発展させるためのヒントを宿している。これらを 21 世紀社会に生かすために、掘り起こし、共有する取り組みを始めよう。

里山文化は地域における人間関係と自然環境の中で創造された市民共有の財産であり、市民自身が暮らしの中から学び取り、地域で実践し、継承する取り組みを通して現代に生かし、子どもたちに伝えよう。

里山で暮らしを実践してきた先人たちの生活技術と空間認識を学び、里と森のあり方の現代的な理解につなげるとともに、里の暮らしを困難にしている人為的、社会的要因を克服し、人と自然が相互に関係しあう良好な生態的環境の構築に努めよう。

里山はすべての市民にとって無限に広がる学習空間であり、その多様な価値を豊かに体感するために、市民が交流し、学びあう仕組みを確立しよう。



提案 4

動植物との出会い、ふれあいによる森林環境教育

「海上の森」は、多くの動植物、とりわけ東海丘陵要素植物群と言われている東海地域の固有の種、もしくは全国的に見ても希少な動植物種が生息・生育する場として重要な地域であり、動植物との出会い、ふれあいを題材とした環境教育を進める場として最適である。このため、市民活動としての生物調査や各種調査学習会の開催などにより、自然の不思議や生物の魅力などを学ぶ取り組みを進めている。

全国各地で失われつつある貴重な自然や生き物たちを守り、命の尊さ、そのつながりや循環を大切にするために、自然環境がもたらす多様な生き物たちの命からのメッセージを真摯に受け止め、それを活用した森林環境教育のあり方、進め方について提案する。

我々人間に生物をつくる力はない。小さな生き物にも大きな生命の力があり尊厳しなければならない。人も確かに自然の一部であることを基本認識とし、命を守りそのつながりを大切にするという観点から、自然を考え、どのように保全していくかの理論を深めよう。

生き物たちの恵によって私たちは生かされている。単なる保護、愛護だけでなく、死が新たな生を育むことに気づき、理解し、「いただきます」と心からの感謝と手を合わせる謙虚な気持ちを実感できるようなプログラムを導入しよう。

現在地球のおかれている状況は良くない。まずは身近な森林において、感じるプロセスを通じて、見て体験し楽しみ、観察、監視、診断、看護（森を見る）というように、各段階への参加プログラムを多くの人と創っていきこう。それにより、生態系の質の向上を図り、より安定した地球をつくり、次世代にも続く人々の幸せを目指そう。

森は世代を超えた交流の場となり得る。その中で生まれてくる多くの問題に対し、意見を述べる機会と勇気、相手の意見を受け入れる勇気を持てるようにしよう。そのためにも、顔を会わす機会を多く持つよう心がけよう。情報の収集判断と公開性において、関わった全ての人が充実感と責任感をもてるような、合意形成を目指そう。

海上の森からのメッセージ

かつてはあたりまえにあり、どこにでもあるように思っていた海上の森が、愛知万博で一躍日本はもとより世界からも注目され、脚光を浴びました。

そして、今は愛知万博の象徴の森となり、記念の森となりました。

今回のシンポジウムで、皆さんから各分科会のテーマに沿って、提案していただきました項目については、海上の森が抱える問題【これからの海上の森のあり方】に対する応援メッセージであると受け止めています。

そして、それは、全国で同じ課題を抱えている地域にとっても示唆を与えるものであると信じています。

このレポートで示された提案は、それぞれに意味深いものでありますが、森林環境教育を通して、森林や里山に関する多くの課題を克服するには、さらに深く、広く、多岐にわたる切り口からの議論と提案、そしてそれを実践する行動力が必要であります。

そのことを再認識して、海上の森は、あいち海上の森センターという拠点を構え、新たなスタートラインに立ちました。

これから「協働」をベースに多くの試行錯誤を積み重ねつつ、愛知万博の理念・成果を確実に継承し、発展させるため、県内はもとより、全国・世界のモデル・さきがけとして、人と自然が共生する社会の実現に貢献していきたいと考えております。

ありがとうございました。



海 上 の 森

未来に発展するイメージと豊かな森や水を表すシンボルマーク